

日本絵画におけるうつしの変遷の研究

—京都市立芸術大学芸術資料館模写資料の調査及び

京都御所小御所襖絵のうつしの制作を通して—

小林 玉雨

本研究は、東洋・日本において古来、様々な目的や技法を用いて模倣されてきた絵画を「うつし」と総称し、豊富な実作例および文献資料の両面からの調査・考察によって歴史的な変遷とそこに流れる伝統性を解明する。それと共に、古画のうつしを実作することで、現在のうつしがもつ課題と価値を考察することを目的とする。具体的には、京都市立芸術大学（以下、本学）芸術資料館が所蔵する模写資料群を調査の主対象とし、実作においては、うつしを通じた古典学習によりやまと絵の伝統を継承した幕末の画家・冷泉為恭が京都御所小御所に描いた襖絵《鷹狩り》を主対象とする。

「第1章 研究の背景」では、模写・倣古図・複製画・復元画など、原本から写された「うつし」の歴史的意義や多様な制作方法などについて概要を述べた。古来うつしは東洋の絵画理論の中で、「伝移模写（伝え移すとは模写をすることである）」として、絵画における重要な要素の一つに数えられている。このような伝統的なうつしをめぐる言説と、先行研究の状況を示した。

「第2章 うつしの変遷」では、本学芸術資料館が所蔵する「模写資料」を対象に閲覧調査を行った。調査の結果から、①江戸から明治（～1912）、②大正から昭和46年（1912-1971）、③昭和46年から平成（1971-2015）に大別し、各期間について次のような考察を加えた。

「①江戸から明治」のうつしは、「骨法用筆（筆づかい・筆法）」に主眼が置かれていた。本学開学時は、近世的な画塾の形態から近代教育制度への適応や、殖産興業への絵画技術の応用が目指されており、この目的に合わせて本学教員により「運筆手本」が研究開発された。運筆手本は諸流派の絵手本を参考に作られたため、運筆と臨摸を両輪とする伝統的な「写す教育」が近代教育の中にも受け継がれた。その後、明治20年代に政府主導による文化財模写事業が始まると、運筆教育により習得した筆法を用いて古画を写す「古画研究」が盛んになった。古画研究は、伝統的な絵手本教育を基盤としつつも、流派様式に縛られることなく古画という先達に学ぶ継往開来な方法であった。古画研究の成果は個々人の制作に還元された。

「②大正から昭和46年」は、文化財模写事業の中で「文化財模写」の方法論が新たに形作られた。文化財模写として、経年変化を含めた絵画の現状を写し取る「現状模写」の技法や、壁や板に描かれた絵画を紙に写し取る「壁画模写」の技法が研究開発された。特に壁画模写は戦後においても継続され、得られた研究成果は「日本画の世界性」を拡張するための

一手段として個々人の制作に還元された。

「③昭和46年から平成」になると、機器による複製技術の進歩により、うつしは原寸大の印刷物から制作されるようになった。また、文化財保存修復における科学的手法が向上したこともあり、経年変化以前の状態を科学的根拠に基づいて想定する「復元（再現）模写」や、同素材・同技法で描くための「素材研究」が盛んに行われた。さらに、本学教育課程の調査から、本学は日本画の学位をうつしの提出により授与するという、全国的にみても特徴的な傾向を有することが明らかになった。

このような調査の結果、うつしの技法は時代状況や科学技術の進歩に合わせて変化しているが、「心」や「精神性」を含めて移し伝える姿勢は途絶えることなく受け継がれていることが明らかになった。そして、この心を写すということが、本学の特性を生んでいた。

「第3章 うつしの制作」では、冷泉為恭筆《鷹狩り》のうつしを実際に制作した。古来心のように重要なものは筆法に宿るとされていたが、今日では現状を正確に写し取る技術が追求される中で、自家流にまで至るような高度な筆法が失われつつある。そこでまずは、学習方法を含めて、筆法の見直しを行った。その上で、筆法の技術とこれまでに培った現代の見た目を写す技術を両方とも活かすことができる制作方法を検討した。実践を重ねた結果、機器複写を大下図として扱うことで、墨絵のような筆と墨が主題となる場合でも写しやすい方法を新たに考案した。これは伝統的な日本絵画の制作過程とほぼ同じであるため、原本に忠実でありながらも、自然な筆運びを叶えることができた。

京都御所小御所襖絵は、色鮮やかに彩色されたやまと絵であることから、筆法を用いて「染める」という彩色方法と、京都らしい「温麗」な色彩表現を試みた。また、今日では「絵画を描く/制作する」という言葉遣いが一般的であるが、本学開学当初は「絵画を写し出す」という言葉が用いられており、ここでの絵画とは「筆墨で形象を出だし、彩色を施したもの」であると説かれていた。「筆法」だけでなく「彩色法」も併せて研究することにより、「描くことと写すこと」が密接であった古来の絵画制作のあり方を目指した。本研究の対象は全て京都に由来するものであり、近世京都画壇との連続性を有する本学においてでなければ実現し得ないものであった。

以上の調査・考察とそれを踏まえた実作により、うつしは伝統的に重視されており、本学においても開学以来、日本画教育の柱の一つとして受け継がれて来ていることを明らかにした。本学のうつしは視覚的な図様の模倣行為にとどまらず、先人の精神をも学び取り、継承しようとする営為である一方で、時代状況や目的により技法や表現に創意工夫を凝らすことで調和を図るという時代性と伝統性の両方を兼ね備えたものだった。科学の急速な進歩により、原本の保存や修復技術の研究も盛んとなり、画像の記録・複製が容易かつ高精度で行えるようになってきていることは望ましいことであるが、そのような時代であるからこそ、芸術作品に内在する「心」のありようを理解し、修練を重ねてそれを人の身体行為として受け継ぎ、実体化するうつしの制作には一層の芸術的、社会的意義が求められるのである。